

横芝光町教育委員会

かつて 探してみると、 院堂宇が ば 桐 ている。 れる武 や墓 の崩 の土 帰依するように 仏教が入り、 なると急速 の 地 壊により、 地 のみが 士団 14 あ 江 0 仏教の里 歴 戸 U) は、 時 史は、 が に 小祠に 残されているところや、 代になると各集落の寺院は檀家制 その境 最も早く 宗教の近代化 開 上がよみ なり、 発が 集落の寺院は存続が困難 葉県の 古く 内に 14 進 つみ、 は旧 がえってくるようである。 様が隠れる様に 出現していた。そうした武士団が鎌倉時代になると政 檀那となって各地 東 部、 は五輪塔や板 多くの人々が がなされてい 石器時代の三 太平洋岸に 地 納められて 碑 だになり、 、った。 に寺 一万年 域住民にも忘れ去られているところもある。 面して、 などの中世石塔を見ることができ、 住む様になっ 院を創 前から、 度に組 平安時代後半になると各地で武 九十 住職が不在になったり統廃合されていった。 11 たり、 建する様になった。 縄文・ た。 み込まれ、 九里平野と下総台 それ 寺名も分からなくなった堂宇に仏様が安置され 弥生· 12 伴 地域との結びつきを強 古 って 遺りと続 自然 町 地が広がる、 内でも現在も各集落には必ずと言ってい この 治 いて人々は (精 の舞台の表へと出て力を有してくると、 士が発生 時期か 霊) 崇拝の それでもごく ら存在 L めてい 自 や 然 か な土 特に と共に暮 原始宗教 最近では寺院の名残として小 ったが、近代になると檀 した寺院であることを物 一地で温 両総地域では 一部 か 5 いら、 0 暖なところであ てい 住民 哲 奈良 学思想を有し る の情報を元に 桓武平氏と呼 所 が いほど寺 あ 家制 IJ 語

14 残した仏 像であ 今回 を一つの の企 今回 そ 五 の修理成果を公開することを第一の 0 展示は、 画 0 n 十点におよぶ 像もあ 企画 ば、 展では、 核として地 展を実施 修復するなどの手だてを考えるが、 わせて公開 このような町 こうした仏像 が、 するにあ 域 Ĺ 集め 0 繋 が た 11 0 めたって、 りを継承されることを願っ の 仏 かにこの 14 文化財としての 像の多くがほこりが 教環境の中で、 事 町に多くの優 目的として実施 前 調 査して来た中には盗難 無指定 大切さを喚起するするだけでなく、 町 内で 被っ れ た仏像 0 するとともに、 四 ても ものは管理者の責任に ているだけでなく、 件ある県指定有形文化 いる。 があるかを示そうとした。 12 あって何 町 内の 破 他 かかっている。 も 損しているもの 財 0 残されてな 指 0 定仏 信 仏 仰 様 こうして集め 0 像や のうち、 対象としての 11 無指定の まだ、 が多かった。 所も少なからず見られ 昨 年、 た仏像 現 14 像があ 存する 修 「仏様」 理 指 を る所 今も 定している 14 施 を見直 画は三十 は た 古色を まし た。

回 14 0 気の出るお言葉も頂きました。 理者 からは 展を実 大なご するに 協 あ めたって、 力を得、 あらためて皆様に心から御礼申し上げます。 関係者の 14 様 の貸出 皆 12 様 快 実行委員会の先生方には、 応じていただきまし た。 ご指 中 12 はこのような企画を待ち望んでい 導 助言を頂きました。

「浄土への招待」横芝光町の仏像展開催にあたって

浄土への招待」 横芝光町の仏像展は平成二十五年六月二十二日~七月二十一日に町立図書館二階町民ギャラリーで開催した

企画展である。

本企画展を実施するにあたって、 実行委員会を組織し、委員の先生方に展示仏像の選定等、 ご指導・ご助言を賜った。

「浄土への招待」横芝光町の仏像展実行委員会(敬称略)

委員長 橋浦芳朗 (永享寺副住職)

委員 大津頼政 (隆台寺住職)

委員 半田照善 (新善光寺住職)

委員 塚本是順(弘経寺住職)

委員 久保田剛士 (明光院住職)

本図録は、 「浄土への招待」横芝光町の仏像展に展示した仏像及び仏画等を収録し、 解説したものである。

本図録の執筆・編集は道澤明が当った。

謝辞

浄土への招待」横芝光町 の 14 像展を実施するにあたり、 多くの関係者のご協力を賜りました。 ここに記して心より御礼申し

一げます。(敬称略)

篠本弘経寺 辻観音院 古屋薬王院福秀寺

篠本新善光寺

小川台隆台寺

宝米明光院宝蔵寺

古仏修復工房傍示戸成就院

千葉市美術館

二又長福寺

飯泉太子宗

横芝光町ふるさと歴史ロマン研究会

加瀬喜久治

片岡鉄夫

越川壽満男

齋藤昭 | 洋一

下る

實川信夫

竹内敏恭

健之

向後通

越川裕男

下河章男

長嶋千代美

鈴木平

宮内敏彦

樋口広三

横芝光町の仏像概観

平安時代 かる仏像は皆無であった。そのような中で、 その伝来すらも分からなくなり、 かったが、一同に集め ような所に安置され、 横芝光町には、 した結果、 多くの古相を残した仏像等があることを知っ 平安時 地 て眺めてみると、一定の特徴があることが分かってきた。 元からも省みられなくなって、 代作と伝わる県・町指 かつ仏像そのものに銘すらも書いていないものが多かった。 横芝光町の今ある仏像について簡単ながらその概観を、 定の仏像は 破損したり埃まみれになっている 知られていたが、 た。 個 心々の仏 像を拝 今回 しかし、 むと、 0 企画展 この 実施 14 ほとんどの 像が多かった。 地域での そのため、 のための調 場合、 ここに述べることにする。 特 徴 をつか 正確な像 查 そのような仏 無住 を一 年に むことは 0 立年代 お寺 わ た 像は 0 祠 分 0 7

しく、 られている。 られている。 立 ちと衲衣の文様などから、 これまでに分かっている中で、 本来の姿は失っているが、 次に平安仏と考えられているのは、 平安時代後期の定朝様式の流 横芝光町の仏像で最も古いものは、 顔立ちの面相や衣の形相から平安仏の特徴を示している。 宝米明光院の阿弥陀如来三尊像 れを汲むものとして評 辻観 音院の阿 価され、 のうちの主尊である。 弥陀 如来坐像である。 おそらく なお、 京仏師の作 脇侍は鎌 木造でだいぶ この 倉時代の作と考え であ 14 像 ろうと考え は 痛みが 端 正 な 顔

鎌倉時代

れている。 同じ姿であ 新善光寺と 鎌倉時代では、 り、 小 主尊の 111 台隆台 前出 阿弥 の宝米明光院の阿弥陀三尊像の脇侍で、 寺 0 陀如来像にこの時代に脇侍を追造して、この時代に流行った善光寺式三尊像としたのであろう。 銅 造 阿弥陀三尊 像 は、 鎌倉時 代後期 木造であるがこの時 0) 典 型としてその 存在を示 期の善光寺式三尊像の観 Ļ 千葉県内でも 類例 勢至菩薩像 が 多く 5

ま 11 承 と考えられ 久元年と墨書があ また、 造立年と判断され 今回 年度 の修理では、 修 そのようなことで、 理 IJ した古屋薬王院の薬師如 た。 あ 表面 この わせて大檀那平常秀名があり、 に 麻布を貼り、 像に関しては、 胎内銘 来立像 漆を厚く塗る木芯乾漆造と言う技法を使っていると判明したことから、 があったことで霧が晴 等身大の大きさに、 は、 造立以来、 初平安時代の作と思わ れた気持ちになっ 重厚な彫りと衣紋 背をはずしての れ て たが、 心の形かり 修理が 1) たが、 16 さらに仏 確認できないことから、 修 平安時代の作と思わ 理 時 像の復古造 0 調 査に よって が あっ 2 当初は古 れてきた。 胎 の 内 紀

知 得られ たことは大きな 収穫であった。

北 朝 室町時

いえる仏 なく 不明な点があるのでこのあと 北 なり、 朝 様 像は少な な形の仏像では、 から室町 制 作年代が分からなくなってしまった。 時 代では、 わずかに市 辻観音院の聖観音菩薩立像もあるが、 京 • 野原馬 0 鎌 時代の範疇としておく。 倉辺りでもあ 頭 観音堂にあっ まり名の このほ た聖観音菩薩立像 ある仏像は知らない かにも二~三件、 こちらは最近の修 が、 この பு が、 武 本町 時 理によって塗り 市西照寺の 期 12 内でも明確にこの時 まで遡るかと考えられる仏 + 直され、 面観音菩薩立像 本来の 代 0 も 彩 12 0 像も 色が分か であ 比 較でき あ る

江 一戸時代

など ランスの 京 たは 後、 徳川 0 都 江戸時代になるとお寺 時 0 0 遊 代 家康の死去後、 七 14 条仏師 行僧 0 とれた体形、 師や大工が江戸を本拠にして関 仏像では、 による造仏が で、 町内の こうした仏 日光 全身に彩色が施され、 は、 多くの 有名であるが、それ以外にも多く に東照宮と輪王寺を建立するため、そこに多くの仏師や 家制度によっ 師 仏像はこの の作とは異なる、 東各地の寺院建立や仏像造立に関わったという。 流れ 手慣れた仏師 て 体 制に組 の仏師によって造られたと思われる。 一木造で素地 み込まれ、 0 作で 0 僧 か あることが分かる。 多くの寺院の建 仏師でない のままの 素朴な彫りの仏 も 0 立と仏 の 大工が全国から集められ 造仏が また、 それ その 像 あっ が造ら らの 像 台座や が 仏師の系統 た あ 14 像の特 れてい る。 のであろう。 光背も丁寧に造られている。 この時代、 つ 徴 が た。 は、 慶派の流れを引く た。 それらができ そ 端 円 正 0 な顔とバ 中で幕

目 次

は にじめに

「浄土への」

招

待

芝光

町

0

14 像

開

た

つ

芝 光 町 0 14 像

浄土への 仏様

小さい 14 様

 \equiv

被災し

た仏

36 34 32 28

五 29 性 0 14 様

5 3 2 1

> 六 14



1 阿弥陀如来坐像 株造 彫眼 漆箔像高 五三・三四 保高 五三・三四 平安時代後期 十二世紀 主観音院 ヒノキ材の一木割矧造で、漆箔で仕上げられた、端正な顔立ちの如来像である。昭和五十三 に、小さい鼻筋に、その時に構造等には水晶が嵌められ、手は来迎印を結び、足は結跏趺坐する。 には水晶が嵌められ、手は来迎で薄い衲衣の様式化した表現は、で薄い衲衣の様式化した表現は、で薄い衲衣の様式化した表現は、 電と考えられる。





修理前の像



背面



右側面

のし本得十そ新、像ら四の そこ 2 指痛 当丘県 たこと りれ 定 2 内 日年度に公 表面保護 表面保護 であるが、 で ヤに 費 以が 6 度用将来 ラリ 漆あ伴 胎 ある古屋 も 王 妍の製法である。 ^冰造りであること 3 が しく がての渡っの ĺ 公益 1) は、 補に な 相 安定を図のためのためのためのための 像 助わか理 移 で たった 展 薬王 表の 0 することなく、 十 面調に査 自 ること 示 米、修理事業が同年に団法人住友財団、千葉助成を各方面に申請しって長く保存するためたため、制作年代等のためなことなく、また、木 える仏 経 义 体が開 院に安置され 0 表 経巻がある なための台 が行われた が行われた が行われた 面 するに 木 0 難 あること 剥 であ 離し 当たって調査し あることが分った また、本格的な像 ででいいででする。 では、本格的な像 では、本格的な像 つりた。台広 当 内 ること、 刳り 有理 座 か そ調の査新 年に が 形文化 lt 葉県、 がこ の査 分 新造などであった。 欠損している左手 T 実施された場で横芝 か施れ上の 平成成 木業 たれ、手間 理をすべく、したところ、いた。本像はの調査ものがある。 間 糞 箔た。光町 漆像 隙 が は一 町平べい調本 かを さ がか塗 から二 ありる 木

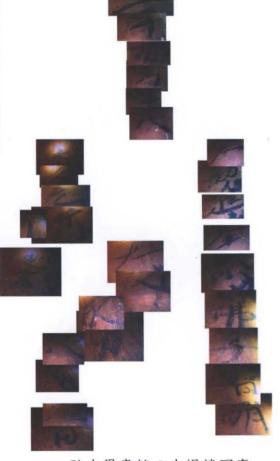


胎内納入経巻と鎹



胎内にある経巻

一部とれた紙片から経巻と思われる。



胎内墨書銘の内視鏡写真 大檀主平常秀平代

承久元年

大才 戌寅 八月八日

てい にも関わったとされ、 書年代とも一致する。 総権介常秀に当たると考えられ、 胎内にあった経巻は、表いたことが考えられる。 墨書銘による大檀主平常秀は、 、なかったことから、内容についてまえれていた。巻いてある紙は硬く、 この上総常秀は龍 この地域にも影響力を持 表面がほとんど虫害に ついては不明であ ・ その生年は墨 な龍角寺再建 千葉常胤 簡単には あ

胎内墨書は次のとおりである。

大勧進金剛佛子智明







3 像金阿 高銅弥陀 如 及び 両 脇 侍 CM 立

主尊 29 六.

代左右脇脇 侍侍 \equiv

五一

cm cm



4 千葉県指定有形立 鎌倉時代 十三 善光寺式の阿弥陀三尊像-葉県指定有形文化財 像銅弥陀 造 鍍 両脇侍 三○·五四主尊 四八·五四 主尊 金 像及び両脇侍立像 彫眼 cm 主尊

螺髪は施毛型、衲衣は胸前で折り返し螺髪は施毛型、衲衣は胸前で折り返し螺髪は施毛型、衲衣は胸前で折り返し紫髪は施毛型、衲衣は胸前で折り返し水主尊至が左手を上に重ねている。 型で鋳造された可能性が考えられて

同



左脇侍 五五·五m



6 阿弥陀如来立像及び 両脇侍立像

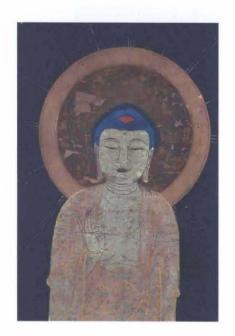
木造

肉髻珠瑪瑙

白毫水晶 像高 主尊九二・〇㎝ 像高 主尊九二・〇㎝ である。主尊の阿弥陀如来は寄木 主尊の阿弥陀如来は寄木 主尊の阿弥陀如来は寄木 主尊の阿弥陀如来は寄木 を帯び、彩色からも である。主尊の頭は大きめ である。主尊の頭は大きめ







7 阿弥陀三尊来迎図

手尊 縦五七· 五 cm

薄い赤色岩彩で三尊と雲台を描いている。 本脇侍 縦五七・七㎝ 横二八・○㎝ 大宮幅である。入っていた箱の裏書には、京 市野原馬頭観音堂 一年に分かれて描かれた阿弥陀三尊来迎図で、 三幅に分かれて描かれた阿弥陀三尊来迎図で、 大宮幅である。入っていた箱の裏書には、京 本脇寺 縦五七・七㎝ 横二八・○㎝ 右脇寺 縦五七・七㎝ 横二八・○㎝ 箱書き

天保八酉年十一月吉日書き 慈恩寺法印覺真

というお寺であったことが分かる。 これによって、馬頭観音堂はかつて慈恩寺





8 十一面観音菩薩立像 株造 玉眼 漆箔 彩色 株造 玉眼 漆箔 彩色 なは、町内仏像では大きいほうで、全体に金箔が残り、状態としてはいいほうであるが、頭上の面しか残っていない。体形は少し太めで、衣は立体的に造られ、天衣は別材で付けられている。蓮華座も蓮弁を丁寧に造り、 台芯に付けられている。







9 薬師

像木師品造如 来立像 彫眼 肉髻珠

像高 三九・八㎝
光背から台座下部までの高さ
七八・〇㎝
上原薬師堂
上原薬師堂
上原薬師堂
に残る。光背は飛天光で、台座は
に残る。光背は飛天光で、台座は
に残る。光背は飛天光で、台座は
に残る。光背は飛天光で、台座は
端正で、全体に丁寧な造りで、手
馴れた仏師が作ったものであろう。
像本体には修理がないが、光背
を修理している。



10 十一面観音菩薩立像 木造 彩色 漆箔 像高 四八・五四 保高 四八・五四 原高 四八・五四 ほとんど損傷のない仏様で、 ほとんど損傷のない仏様で、 明上の十面仏もすべてある。 しかし、光背は近代に入って からの修復の跡があり、釘・ の面相は端整で、衲衣や 天衣など、全体の容像も丁寧 であることを想像される。須 弥檀と蓮台の工作も細かく、 あろう。



11 聖観音菩薩立像 株造 漆箔 彫眼 像高 五二・五 CM 台座からの高さ 六七・八CM 台座からの高さ 六七・八CM 村、その時に両手は新たに補追されて小さく、また、塗り直されて、 今のようになっているが、元々は 素地造りの可能性がある。宝冠は 後補である。台座は別の物を代用 したか。





12 不動明王立像 木造 彩色 玉眼 像高 四〇・〇 CM 火炎光背〜台座 五九・〇 CM 火炎光背〜台座 五九・〇 CM 大炎光背は、一部が像造時の物であるが、ほとんどは新補されている。 台座は赤漆で仕上げられているが、後 に群青を塗布している。頭髪の弁髪は なく、新しい様相を示す。





側面

13 毘沙門天立像 木造 彩色 玉眼 株造 彩色 玉眼 水造 彩色 玉眼 東部は嵌め込み式、胴部は寄席木造りで、 理部は嵌め込み式、胴部は寄席木造りで、 がは不明である。全体に厚く彩色が施され ているが、剥落が著しい。像容がずんぐり として、江戸時代の特徴であろうか。 として、江戸時代の特徴であろうか。



背面



大日如来坐像 木造 彩色 漆箔 木造 彩色 漆箔 江戸時代 二戸時代

14

飛天光背・蓮台を有する像で、頭部・胴・背・手・足の部分を合わせた寄木造りである。全体は漆箔で仕上げられているが、頭髪は群青で彩色されている。



背面



右側面





15 阿弥陀如来坐像 木造 彫眼 彩色 像高 二〇・三㎝ 台座~光背の高さ四九・三㎝ 傍示戸成就院 傍示戸成就院 疾元戸成就院 変治で、黒地に金彩している。 変治の台座は、簡略化されて いる。 cm





16 如意輪観音菩薩坐像 木造 寄木造 玉眼 白毫水晶 彩色像高 二三・七四 保示戸成就院 標示戸成就院 大造の如意輪観音は珍しく、町内ではこれ以外には確認して、頭のかしげ具合となくし、形心な腕をなくし、彩色もだいぶ落ちた立て膝とから、それと分かる。蓮台は蓮花弁を付けたものである。







頭部は別材で、体部は前面と 大いる。像全体に下地に胡粉を をり、その上に漆箔をつけて仕 上げている。 本像は山武市板附西照寺の 本像は山武市板附西照寺の 本像は山武市板附西照寺の 本像は山武市板附西照寺の





10 阿弥陀如来立像 木造 素地 像高 四三・三 CM 江戸時代 市野原馬頭観音堂 市野原馬頭観音堂 (現宝米明光院)

いが著しい。

歌らかい材であったためか、虫食

歌り出した像で、素朴であるが、

一木造りで像本体から台座まで



19 聖観音菩薩立像 株造 素地 彫眼 木造 素地 彫眼 江戸時代 田野原馬頭観音堂

本像は一本の木から彫り出した木像で、決して洗練された造りではないが、独ても通じる。

仏にも通じる。

材質は広葉樹で、虫食いはなく素朴では在るが、



(現宝米明光院)

一木造りの像で、手先のみが失われている。しかし、像は定りしている。しかし、像は定型的であり、虫食いはないと型的であり、古くはないとが、それれる。



台座幅七二・〇cm とを には知らない。観音像はいが、木造での七観音はこれ以外には知らない。観音像はいが、木造のの土観音はこれ以外には知らない。観音像はいずれも一木造り、素朴な彫りで、素人の作と思われる。台座は後世の作であろう。

高 1 形眼

小さい仏

22 如 来形 立

下の菩薩像と一緒に考える必要があろう。 から、平安末から鎌倉時代の作かと思われる。 小さい仏像であるが、細かい彫り込みは丁寧に小さい仏像であるが、細かい彫り込みは丁寧に 鎌倉時代 添箔

23 本造 素地 に関うな様から江戸時代の作と思われる。 を思われ、肩と足間に孔が穿たれていた。 と思われ、肩と足間に孔が穿たれていた。 を思われ、肩と足間に孔が穿たれていた。 と思われ、肩と足間に孔が穿たれていた。 と思われ、肩と足間に孔が穿たれている。 形立







四来形立像 一木造り 素地 像高 一六・一四 像高 一六・一四 がらなくなっている。全体 がらなくなっている。全体 からなくなっている。全体 からなくなっている。全体 からなくなっている。全体



和来形立像 本造 彫眼 彩色 像高 三三・三 CM 江戸時代 宮内宝持院 小さい如来形像であるが、 相かい彫刻は丁寧であるが、 見えているのは痛々しい。 未芯に下地の胡粉を塗り、 赤漆を塗っているが、この が劣化を早めているようだ。 像は頭が少し前屈みにな り、肉髻は高めである所か ら、古目かもしれない。



26 木造 彫眼 彩色 保高 四一・七四 八さい像であるが、全 小さい像であるが、全 体に丁寧に造られている。 全体に彩色がとれ、素地 全体に彩色がとれ、素地





像高 木造 像高

観

音像)

上原薬師堂中中中

三四二 二二七 〇五五 cm cm cm

過去、寺院や堂宇は火災に建う事が多かった。今に残されている仏像は、幸いにもそうした災害から免れてきたものである。しかし、この仏像のである。しかし、この仏像のように、火災に見舞われても、灰の中から拾われ、再び信仰の対象とされてきた仏様も少なくない。

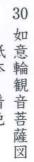


29 1 1 金剛界曼荼羅 縦 八二・○ CM 縦 八二・○ CM だ戸時代 宮内宝持院 宮内宝持院 宮内宝持院 を欠損している。全体は残を欠損しているが、持部



2 胎蔵界曼荼羅 紅本着色 紅本着色 ボーラ時代 宮内宝持院 宮内宝持院 でいる。中央の大日如来がかろう じて確認でき、その周りの八大如来はかすれている。

cm



彩は鮮明である。いるが、絵の線描や色紙は茶色に変色して

三九·五m = = • • o m







五

cm

背面銘文 明和六丑五月 明内には如意輪観音の石像が多数見られるが、本像のように彩色されている。しかし、 の上から彩色されている。しかし、 が色の上地処理が無く、触れると取れて しまうほど脆弱である。 市野原馬頭観音堂 不造 (安山岩) 彩色 公产 (安山岩) 彩色 公产 (安山岩) 彩色 .現宝米明光院) 市野原村出五月明和六丑五月

背面





32 子安観音菩薩図 紙本 着色 軸装 縦六四・二四 横二七・〇四 辻観音院 地区の子安講の時、この子安 でである。 に掛けた。

33

この幡を掲げた。 辻観音院 江戸時代安政七年

当番の家の前に





34 毘沙門天立像 木造 玉眼 彩色 株造 玉眼 彩色 保高 六〇・〇 CM 台座からの高さ 九〇・〇 CM 二又長福寺 二又長福寺 二又長福寺 た。たぶん、一度修復した折に、 表面に厚く塗物を施したために、 未芯が呼吸できなくなり、腐敗が 木芯が呼吸できなくなり、腐敗が 木芯が呼吸できなくなり、腐敗が た兜を被り、大きい顔の毘沙門天 に、た変を被り、大きい顔の毘沙門天







妙見菩薩は北極星を表し、光輪に彫はこの一尊のみを確認した。町内では日蓮宗寺院が少なく、妙目では多くの像が遺こされている。」され、また、日蓮宗と結びついて、 35 妙見菩薩立像 像高 二三・○ cm 台座~頭 三二・三 cm 対見菩薩は千葉氏の守護神とし が見菩薩は千葉氏の守護神とし 波上に霊亀があり、その甲羅の上に童子星を表す丸点が付けられている。台座は妙見菩薩は北極星を表し、光輪には八 る。 状の菩薩がのる典型的な妙見菩薩像であ 妙見菩薩 しかし

本町台 大菱屋は時間のは 色が鮮明であるが、 屋繁蔵」の墨書がある。に「弘化四未年大佛師八口の経過は窺える。 木芯の 傷 みは 日 市 場 伺



-寺に移された。 本像はもともと篠本三区の山要害台



37 いたを図天あ掛とい学

CIII

横芝光町の仏像展浄土へ の招待」

印刷 三陽メディア株式会社編集・発行 横芝光町教育委員会刊行 平成二十五年六月二十二日

